
勇者と魔王

オレンジ！！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者と魔王

【Nコード】

N4845Q

【作者名】

オレンジ！！

【あらすじ】

普通の中2が異世界へ飛ばされた。しかも戻れない。無事生還するため中2が魔王に立ち向かう！？

第0話 設定（前書き）

背景描写などがものすごく弱い（それ以外にも問題点はたくさんある）ので、設定という形でも随時更新していきます。
また、他の話もより良い表現、誤字脱字は発見次第修正していきますので読み返していただければ光栄です。

第0話 設定

！注意！

これは設定資料のようなものです。

初めての人は見ないことをお勧めします。

世界

・この世界は魔法が使われず科学がある程度進んでいます。

主人公

・吉原秋登よしはらあきと

身長約170cm、体重約47kgの中学2年生

勉強・スポーツともに普通。

・杉橋風徒すぎはしふうと

身長175cm、体重43kgの中学2年生

勉強・スポーツのどちらも万能。

・エルファ

SSSランクの最強な戦士。

秋登たちと同じ中2。

・ラルト

Aランクの戦士。運を操れる、ラッキー・コントロール絶対運という能力を持つ。

・シリウス

旧世代の勇者。G G Gランク相当。

・ネレウス

勇者のお供だったが、正体は創造神。
最強の力を持つ。

・エイティス

新世代の勇者であり、エルファの兄。
4 Gランク相当

魔法

この世界の一部の生き物は魔法を使えます。

・疑似魔法

魔法を使えない者が科学で再現した魔法。
威力はやや劣ります。

・魔法

最も一般的なものです。

・超魔法

魔法の中で最強の部類に属します。
威力も最高ですが、それに伴い魔力消費量も高くなります。

・覇魔法

神に等しい威力の魔法。

・絶魔法

覇魔法の上位種

ランク

・Fランク

魔法が使えない者

・Eランク

疑似魔法使用者

・Dランク

初心者

・Cランク

初級者

・ Bランク

中級者

・ Aランク

上級者

・ A Aランク

高度な魔法を使える者

・ A A Aランク

超魔法がかるうじて使える者

・ Sランク

超魔法が使いこなせる者

・ S Sランク

Sランクの条件を満たし、かつかなり強い者

・ S S Sランク

S Sランクの条件を満たし、かつ最強な者

・ Gランク

S S Sランクの条件を満たし、神に匹敵する力を持つ者

・ G Gランク

神を超えし者

・ G G Gランク

覇魔法を使えし者

・ 4 Gランク

G G Gランクの条件を満たし、かつ最強な者

・ 5 Gランク

創造神に匹敵する者

・ N G (次世代)ランク

魔法階級認定試験で5 Gランクをとり、さらに神に認められ

し者

神について

神は世界を支配してはいません。

神はこの世界を見守り、秩序を守るための存在です。

第1話 開始（前書き）

- 1：作者は自己満足で書いています。
- 2：作者には微塵も文章力がありません。
- 3：作者は誤字脱字等をできるだけ訂正するよう努力します。
- 4：作者は不定期更新かつ更新が異常に遅いです。

上記の点に納得できないなら見ないことをお勧めします。
また、気付いたことがあればお知らせください。

第1話 開始

俺は吉原秋登^{よしはらあきと}、身長170cmの普通の中2だ。気がついたら草原に飛ばされていた。

状況を理解したくない。そう考えていると、

「私は神です。」

あなたは吉原秋登ですね？」と変な奴が声をかけてくる。

「そうだが、なんだ？もしかして、草原に飛ばした…なんていうわけ「やりました。」おいつ…！

何やってんだ？早く、戻せ！」

「それが…、それが？」ミスったつばくて…「…戻せない…のか！？」…はい。」

（嘘だろおおおお！？しかも何で飛ばされてんだ？なんか悪いことしたのか？）

「でも、戻る方法が一つだけあります。これです。」と神は石のようなものを出した。

「あんのかよ！じゃあ戻してくれ。」

「待つてください。この石は緑色です。「緑？何言つてんだ？黒じやん。」はい。」

この世界にはもともと魔法はありませんでした。しかし5年前に現れた魔王が乱用したことにより、この石 魔法石 の効力がなくなりつつあります。現にこの石も黒になつてしまっています。効力を復活させるには魔王を追い出すか倒すかの2つしか方法はありません。

「やるしかねえのか」「はい。後、この指輪を貸します。「指輪？」はい。魔法石の欠片が埋め込まれているため、連続で2分くらいは魔法が使えるでしょう。「？ そうですね魔法の使い方は？」またあとで会いに来ます。」と言い残し消えてしまった。

「魔法ってどう使うんだよ。」秋登はとりあえず指輪をつけた。

第2話 特訓

「っていうか指輪はめて、次どうすんだよ。」とため息をつく。すると何かが落ちている。拾い上げると、5枚程度のルーズリーフに殴り書きしてある。

1枚目には「パンフレット」見た方がよいよ」と書いてある。

「旅行じゃねえんだよ!？」とつつこみながらもそれを読む。

「魔法の使い方は、声に出さずに魔法名を言う。」∴声に出さずに言う!?!?!?どういうことだ?しかも魔法名ってなんだ?メジャーなものから言うてごうか。ファイアー、サンダー、∴、∴、∴、

100は言ったぞ!?!?!他に書いてねえのか?ん?「*魔法名は日本語で大丈夫です」??!?!俺の今までの苦勞を返せ!!?!でも声に出さずにどうやって言う?心の中でか?やってみるか。「そして秋登は「燃える」と言ってみた。すると足下の草に火がついた。

「おおっ!でもかなり疲れるな。休憩するか」と言い、秋登は敵対策に「守れ」と魔法をかけた。

第3話 特訓 Part 2

秋登は3枚目のルーズリーフを見た。

「環境は地球とほぼ変わらないです。聞きたいことがあれば、呼べ、神を」と魔法で読んでください。「始めからそれ言えよ…。」そして4枚目。

「まつすぐ行くと大きな町がある。買い物等はそこで済ませましよう。」そうか。制服のままだからな。」ラスト5枚目。

「そこに住む生物は知能はそこそこあり、凶暴な生き物は少ないです。なお、その世界の住人は疑似魔法を使ってきます。疑似魔法とは基本的に魔法の使えないこの世界で生み出された、科学の力で疑似的に再現した魔法です。もちろん本物の方が強いです。ちなみに今の段階で炎よ、塔となれ」が連発できるなら、指輪なしで魔法は使えます。」いや、無理だから。」

そして秋登は歩き出した。7時間後「長えよ。いつになったら着くんだよ…まてよ何か変だ。崩れる」！「すると、あたりがガラスのように崩れ落ちる。

「畏かつ！」

すると後ろから「ククク…気付くのが、遅えよっ！！！」と謎の男が蹴りをいれるが、^ハ浮け^ヾでよける。そして「なめんなよ、^ハ炎よ、龍となれ^ヾ！！！！！！」龍の形をした炎が男を包む。

「うああああああ！！！」と悲鳴をあげた。すると男が灰になり崩れ去った。

「意味わかんねーよ…。どちらにしても危険か。」と考え^ハ隠せ^ヾで身を隠し町まで歩きだした。

第4話 親友

秋登は町に着いた。周りの人間はすべてスーツを着ている。「案外普通じゃん。いや、全員スーツな時点で普通じゃねえか。」とぼそっと呟いたその時、ローブを着た人間が手招きした。(めっちゃめっちゃ怪しいのが1人いるじゃん!)と心の中で突っ込みを入れ、ついていく。ビルばかりの街の中に数軒しかない小屋へ入る。小屋に入ると人間はフードをとった。それは、人間じゃなく神だった。「つていうか何でそんな怪しい恰好してんだよ。」

「神ってバレたら大変でしょう?」「いや、その格好の方がバレるだろ…。で、何の用だ?」

「魔王があなたの存在に気付きはじめた。見つかったら、おそらく…消されるでしょうね。」

「け…消される!?」「はい。ですから、表を何の考えもなしに歩くのはやめてください。」

そして2つ目。あなたの家に来ていた子を連れてきました。「!!まさか…!」

「この子です。」と神は少年を連れてきた。こいつは俺の親友、杉橋風徒だ。

文武両道な天才中学生。正直こいつなら、1人で魔王倒せるんじゃないかというほど最強。

「連れてくんよ…。」「よろしく」「…よろしくじゃねーよ。」

第6話 仲間

そして秋登、風徒の2人は「隠せ」を使い、転々と町を移動していた。

～魔王側～

「魔王様、四天王のブラストがやられました……。」

「くそがああああつ!!! 餓鬼相手に何やってんだっ!!! 仕方がないな……」

「ムーンを連れてこい。」

「ははっ。」

地下にて

「何の用だ?」

「ムーン様。魔王様がお呼びです。」

「今行く。」

……

「俺だ。何の用だ?」

「ボルティーの町周辺に秋登、風徒という2人の人間がいる。」

「つぶせと?しかし、四天王がいるだろう?」

「ブラストが敗れた。」「そうか、面白い!やってやる。」

～秋登側～

「秋登、疲れた。休もうぜ……」

「風徒、てめえ何回言ってるんだ。運動神経めっちゃめっちゃ良いくせにそういうこと言うなよ。」

と、普段通り会話をしつつ歩いていると、誰かが寄ってきた。

「あの……すいません。僕1人なんです。混ぜてもらえませんか?」

(怪しい。風徒は気にしていないようだが、明らかに異界の人間の中に混ぜてもらおうというのは

変だ…。とりあえず様子見か？)

「構いませんよ。ただ旅の邪魔はしないでくださいね。」

「ありがとうございます。」

そして旅を続ける。

第7話 盗賊

旅を続けていて困ることはなかった。しかし、また落ちてきた、ルーズリーフ製のパンフレット。

秋登はなぜ上から落とすのか疑問に思いながらも手に取った。「魔法の中には>超魔法<というものがあります。>超魔法<は威力/効果、魔力の消費量がともにものすごく大きい魔法です。そこでさらなる強敵を倒すため、近日中にあるものをお渡しします。」あるものってなんだ？」と秋登は思ったが、それ以外は書いていなかった。

〈魔王側〉

”ムーン、まだなのか？我慢できん！”と魔王は心の中で交信する。もうちよつと待ってくれ。あと少しだ。”とムーンも返す。

〈秋登側〉

しばらく旅を続けていると、盗賊に出くわした。

「金や持つてるものを全部よこせっ！！」

「おいおい、盗賊さんよお！いいよ。…なんていうと、思っかつ！！！！！！！！」

(俺が2週間も前から練習した魔法)

「へ不死鳥よ、魂を吸い取れ！！！！！！魔法だ！？馬鹿な！！！！ぐああああつ！！！！！！！！」

秋登の放った渾身の一撃は盗賊を一発で仕留めた。

旅を続ける3人は大都市エルバーンに着いた。

この世界で5番目に大きい都市であるその街に、なぜか人が少ないいや、いない。

第8話 裏切（前書き）

60人以上もの方々に見に来ていただいております。
これからもがんばっていきます。

設定に矛盾等がありましたら、気軽に作者にお知らせください。

第8話 裏切

秋登は絶句した。理由は簡単、誰もに住むことを理想とするような大都市に誰もいない光景などありえるはずがないからだ。

「嘘だろ…。」

すると風徒が反応した。

「畏だっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

風徒の攻撃が敵に当たる。

「効かない!!」

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「疑似魔法かつ!!」

（風徒は魔力がもうないはず…俺がやるしかない!!!!!!!!!!）

「決める!!!」

（この魔法は5分の間だけ能力を10倍にして戦える魔法）

そして秋登が走り出す。敵は魔導波を放つ。秋登がかわすとビルにあたり崩れ落ちる。

「炎よ!!!」

「!!!!!!!!!!」

10倍に拡大された炎が敵を襲う!しかし、敵も雷神よ、迎え討

てで応戦してくる。

2つの攻撃が重なり 相殺される。秋登は焦る。

（時間が無い!）

秋登の攻撃が敵に当たる。が、効いていない。「!!!!!!!!!!」

「良い素質は持っているが。相手が、悪すぎた。俺は四天王のフ

アインだ。

お前の話は聞いている。魔王様のところへ来るか、死ぬか、選べっ

「!!!」

「ついていく」

（後は任せた風徒!!!）
風徒は何かの魔法を唱えたが、ファインは気にすることなく秋登と

ともに消えた。

「嘘だろ?…」

その時。

「風徒。お前は俺が相手だ。」
と旅人^{ムーン}が声をかけた!

第8話 裏切（後書き）

それにしても他の作者さんの書いている量ってすごいですね。

全く真似ができない（苦笑）

それでも出来る限り頑張っていきます！

第9話 連行

〔風徒側〕

「え？旅人まで……？」

風徒は旅人を信じていた。まさか敵だとは思っていなかった。

風徒の悲しみは怒りへと変わっていく。

「貴様っ！！！！！！！！！！」

風徒が駆けだす。すると

「パワーウェーブ魔導波！！！！！！！！！！」

とムーンは手のひらから魔導波を出す。

さらに風徒もそれに反応する。

「エクスカリバー作れ、聖剣を！！！！！！！！！！」

風徒は魔法で作りに出した聖剣で魔導波を裂く。

「マルチ・ウェーブそこそこ強いかなら、多重魔導波！！！！！！！！！！」

100を超える数の魔導波が作り出される……！！

（この量はヤバイ……）と風徒は考えた。

「強化せよ、聖剣を！！！！！！！！！！」

風徒は強化済みの聖剣で魔導波を一つ一つ高速で切り裂いていく。

〔秋登側〕

そのころ秋登は連行されていた。

「まだ着かねーのかよ……」

するとファインも返す

「後3時間はあるな」「3時間！？」「うっせえ！大体死に行くのに待ち遠しいのか？」

変わったやつだな、お前。」

（死にはしない！！！！！！！！！！）

と秋登は決心を固めた。

第10話 覚醒(前書き)

ついに10話達成です!!(短いですが)
このペースで頑張っていきます。

第10話 覚醒

〔魔王側〕

謎の人物が魔王に交信する。

” 秋登、風徒の件はどうなっている？ ”

” 安心しろ、ある程度進んでいる。 ”

〔風徒側〕

「くそおおおつ！！！！」

何度も突っ込み、やられ、また突っ込む。

こんな光景がもう30分は続いているだろう。

すると、互いに攻撃をやめた。

そしてムーンが話し出す。

「持久力はほめるが、攻撃が単調だな。
スタミナ

まあこの魔王様の側近 > 龍殺しのムーン < 相手に
スラング

30分持つのは天才な証だな。」

「うるさい…俺は完璧を求める！！そのためにお前を超える！！！！

！！！！」

その言葉にムーンは驚く。

「その力は努力か。ちなみに残念だ。なぜなら

俺は完璧主義者は嫌いだつ！「龍波動」！！！！！！！！！！」

異常に大きい波動が風徒を飲み込む！！

「効かない！！！！「超魔法<不死龍の鱗」！！！！！！！！！！」
ドラゴン・シールド

すると、目の前に巨大な盾が現れ、龍波動を防いだ。

第11話 月食(前書き)

タイトル意味不明だったらすみません。
あと毎話600字目標でやっています。

瞬間移動した風徒は聖剣をムーンの頭上へ振り下ろす。

「これで終わりだあああっ!!!!!!!!!!!!!!」

ムーンに直撃し崩れ落ちる。

「強……過ぎる……」そして力尽きた。

「勝った!!!!!!!!!!」

第12話 魔王

（秋登側）

秋登に交信が来た。

” 誰だ？ ”

” 風徒だ。 ”

” 交信できる状況ってことはもしや…… ”

” ムーンを倒した。 ”

（怪物だろ………）

” じゃあまた後で。俺はやること残ってるし。 ”

” わかった。こっちもそちらへ向かう。 ”

すると城に着いた。

「長げーよ！！時間かかり過ぎだ！」

「生贄のくせに文句言うな、餓鬼！」

「なんだと!？」

しかしファインは話を聞かなかった。

「門を開ける、四天王のファインと………生贄だ。」

門番は「ははっ。」と通す。

「で、城は何階なんだ？」

「5階。」

「おっ？ラッキー！」

「………そうでもないんだな、これが。」

「えっ？」

「この城は地下からしか入れない。

それもB99Fからしか。「なら瞬」…魔法はプロテクトがかかっ

てるから使えない。」

2時間後

「着いたあああああっ！！！！！！！！！！」

「やっただな…。魔王様、謁見です。」

「いいだろう。」

3mはあるような扉が開く。

(……)

魔王は秋登に向かって話し始めた。

「ようこそ、我が城へ。私は魔王ダークだ。よろしく。」

といつても数分の命か……。」

(おめーが殺すんだろうが!)と秋登は心の中で突っ込みを入れた。

「聞こえているぞ、心の声だ。そんなことなら、

今すぐ楽になれっ!!!!!!!!!!」

「瞬間移動!!!!!!!!!!」 「なに?」

秋登は瞬間移動で束縛を解き、かつ魔王と距離を開ける。

「一つ言う。お前に俺は倒せない!!!!!!!!!!」

「魔王のこの俺が、新米にか!?笑わせるな!!!!!!!!!!」

「なら見せてやる その証拠を!!!!!!!!!!」

第12話 魔王（後書き）

次話から対魔王戦になると思います。

第13話 対峙

「馬鹿が！せつかく抜け出したのに…後悔しろっ！！！！」
魔王が急接近する。

（速い！）

「ハ不死龍よ、焼き尽くせ！！！！」

「待て！ハバーチャル・フィールド仮想領域！！！！！！！！」

あたりが歪みはじめる。

秋登はこの魔法を観察する…

（場所移動みたいなものか……）

「言っの忘れてたが、なぜ世界征服をするんだ。」

「お前、もしかや私と同じ立場のつもりか！？」

「質問に答える。」

「面白いやつだ。気に入った。」

（しかし…）

魔王は謎の人物に交信する。

”世界征服の理由を教えてもいいか？”

”駄目だ、まだ早い。奴は頭が回るからな……”

”そうか…残念だが仕方がないか。”

「教えることはできない。」

「なぜだ。」

「……………」

「答える！！！！…それが、この世界から立ち去れ！！」

「なぜだ？貴様に利点などないだろう。それとも

勇者のつもりか？」

「お前がいるせいでこの世界の魔力は枯渇している……」。

そのせいで俺は元の世界に帰れない。だからだ。」

「残念だ……期待していたのに。結局どいつもこいつも私利私欲か。

完成しかけている征服をやめると？自己中心なお前のためには？

ならば断わる！」

「なら決闘バトルでケリをつけるってか。」

「勝てるのか？この俺に？」

「>特殊能力アビリティ＜方向操作ベクトル・コントロール」！！

すべての攻撃は俺には当たらない！！」

（ただ、いくつか弱点はある。奴は気付くか？）

秋登は魔王の特殊能力アビリティを破るべく頭脳をフル回転させる。

（……これなら、いけるか？いちがばちか！！）

第15話 決着

秋登、風徒が魔王と戦っているとき、2人の人物が動き始めていた。
〈勇者側〉

勇者シリウスは魔王の城へ向かっていた。すると、

「何の用だ？」

「背後の気配が分かるのか!？」

「俺は勇者。何だつて分かるさ。ところで、

お前の名前は？そして何をしに来た。」

(何でも分かつてねーじゃん!)

「俺はネレウス。俺は2年前に職を失った。で職探しつてところにお前の情報が耳に入ってきたという訳だ。「で殺すと。」そうそう

……

つてんな訳ねーだろ!!!お供になりに来たんだ。

「きび団子はやんねーよ」「いらねーよ!」

「まあいいだろう。かまわないが邪魔したら

斬る。」

「!!!!!!……ああ、よろしく。」

〈ファイン側〉

あたりがぶわつと明るく光ると、そこに秋登と魔王の姿はなかった。

「……。」

そしてファインが謎の人物に交信する

”すべて順調に進んでいるのか?”

謎の人物も返す

”はい。このままなら大丈夫です。”

〈秋登側〉

「ふつ、風徒?今のは何だ。」

「これは相手に植え付ける魔法、パラサイト寄生魔法。

好きなタイミングでしかも相手の立場で発動できる。」

「じゃ、やるか。」

第16話 追加

そして魔王を倒した後、もう1人の人物が動き出す。
「???」

ある人は旅をしていた。その名はエルファ。青くて長い髪の秋登たちと同年代の少女。エルファも異世界に連れてこられた地球人の1人。実はエルファというのはマスターネームで、マスターネームというのは

階級認定試験でSSSランクに認められたものに付けられる称号だ。そしてエルファは異世界に来て2週間、独学でSSSランクを持つほば天才。「転送せよ、秋登のもとへ」

「秋登側」

城を出る。この世界で2番目に大きいファーレンという町まであと少し。

すると秋登、風徒の足下に魔法陣ができる。

「罨か？」

すると、少女が転送されてきた。

「……誰？」

「私はエルファ。あなたと同年代です。よろしく。」

「ああ、俺は秋登でこいつは風徒。こっちこそよろしく。」

そして3人になりまた歩き出す。

ちよつどそのころ、勇者が魔王の城へ到着する。

「出遅れたか……。」

「霸王側」

「ちつ、ダークめ。死に際に秘密を洩らしやがって。」
そして交信する。

”カオスです。今後どうされますか”

”どうだっついていいが、秋登・風徒・エルファはつぶせ”

”エルファ?”

”そうだ。どうやらついさっき入ったようだが、

SSSランクだ。用心しろ。”

〈秋登側〉

(まさかエルファは裏切らないだろう…風徒はもっと。

このままいけば万事解決だな。)

と秋登は考えていた。すると

ファーレンが見えてきた。あと少しだと秋登が思ったその時、

ファーレンの上空に龍が飛んでいる。

(馬鹿な!! 偵察か、いや違う!!!)

そしてファーレンへと歩き出した。

第17話 覇剣（前書き）

第2章も応援よろしくお願いいたします。

第17話 覇剣

「聞くの忘れてたが、なんで俺たちを知ってたんだ？」

「神様から聞いています。」

「そうか……」

すると秋登へ交信がくる。

”どちらさまで？”

”神様です。渡したい物があるのでファーレンに着いたら教えてください。じゃあね。”

”……ちよつと待てよ。”

”はい？”

”なんでお前、そんなにこの世界に詳しい？”

”この世界の神なので。”

(こいつ、何か隠してないか？)

”分かった。じゃあな。”と

秋登は交信を切る。

ファーレンはエルバーンの20倍以上もの大きさは誇る超大都市だ。そしてファーレンに着いた。そしてその後、

服を買ったりいろいろ見たりで3日が経過していた。

(おっと、神に交信しないと)

”神。ファーレンに着いた。”

”受け取って下さい”

すると、剣が実体化し床に落ちる。

”その剣は覇剣ディルフア。それを持つことで自然治癒力が大幅に増し、

体力・魔力を回復し、受けた傷を修復します。さらに

その剣は使えば使うほど剣自体の威力・魔力も上がっていきます。”

”！！無敵じゃねーか。”

”では。”

” ああ。 ”

すると真っ先に好奇心旺盛な風徒が聞いてくる。

「その剣は？」

「覇剣デイルファ。かなり強いらしい。」

「ずるい……」

「お前素手で魔王倒せ 「無理だ!!」 十分いけると思っが？」
すると上空にいるドラゴンが火を吐いてくる。

「ファーレンってこんなにスリリングな街なのか？」

秋登が言つと、風徒が返す

「そうかもな」

「嘘つくな!!とりあえず街出るぞ!!」

3人は大通りを駆け抜ける。ある程度街から離れると足を止める。

「いくぞ!!」

ドラゴンの吐いた火をデイルファですべて逸^そらす

第18話 一撃

秋登は大きな声で会話を試みる。

「やめる、何がしたいんだ！」
すると交信がくる。

”秋登よ、お前は交信もできないのか？”

(他人とでも、できるのかよ。)

”お前は誰だ。”

”四天王のフレストだ。魔王様の仇！！”

フレストは交信を切ると秋登へ急接近する。

秋登は避け、デイルファを振るう。

デイルファがドラゴンの足をかすり、減速する。

その隙を狙い、秋登はドラゴンに飛び乗る。

フレストはその行動に驚く。

「なっ！！！！！」

秋登はデイルファで攻める。

フレストも剣を出して応戦する。

風徒も魔法で追撃する。エルファに関しては

魔法もなしで翼を生やしドラゴン自体を攻撃する。

「やめろ、あぶねーだろ。」

「やらない方が良かった？」

「当然だ。」

「ちなみに私ならそんな奴一撃で殺^やれるよ。

（炎よ）」

「そんなのじゃ倒せな……、馬鹿な……」

ドラゴンの30倍はある火球を作り出す。

秋登が飛び降りたその時、龍が火球に包まれる。

「うああああっ！！！！！！！！！！」

フレストは力尽きた。

「霸王側」

「なにっ！？少女相手にフレストがやられた？
ふざけるな！！！！俺直々に倒すしかないな。」

「秋登側」

「あのさ、エルファ？」

「ん、何？」

「お前、強すぎ……」

「SSSランクだったらみんなこれぐらいは強いよ。」

「こんなのがぞろぞろいるのか！」

そして秋登たちが知らない中、ついに霸王が動き出す。

第19話 幸運（前書き）

20話まで目前です。

第19話 幸運

〔勇者側〕

シリウスはネレウスに話す。

「今、秋登という人間が2人を従えて霸王を倒すらしい。俺たちも合流しよう。」

〔秋登側〕

当然そんなことも知らず秋登たち3人が旅を続けるなか、少年が秋登に合流してきた。

「こんにちは。」

小学生のような容姿の少年が秋登にあいさつする。

「よお。ところで誰だ、お前？」

当然の反応を秋登は返す。

「僕はラルト。よろしくお願いします。」

役には立つので、どうか仲間にしてください。」

「どういふふうに役に立つんだ？」

「絶対運ラッキーコントロールです。試しにサイコロありますか？」

「ねーけど、サイコロ作れ、立方体サイコロ。」

「魔法使えるんだ！…で、必ず6が出ます。振ってください。」

そして秋登が振ったサイコロの目は…6。

「馬鹿な……。もつかいだ！」

そして秋登が再び振るが結果は…6。

「制御できるのか……。何の役に立つのか知らねーが、入れてやる

よ。」

「ありがとうございます。」

するとエルファが反応する。

「畏…？強大な力が！」

すると声が聞こえる。

「さすがSSSランク、反応が早い」
霸王が現れ、剣を振るう。秋登はディルファを取り出すと、
攻撃を受け止める。しかしエルファは
「その剣貸して！」
と剣を強奪、霸王との勝負に出る！！

第20話 決戦（前書き）

20話達成です。

それと16話の最初の部分を少し変更しました。

第20話 決戦

「さすが霸王、力がハンパじゃない!!」

とは言いながらも、エルファと霸王カオスはほぼ互角を保つ。

「俺も手段を選べないってか?」と

霸王は言い、異空間から剣を取り出す。

「この剣は魔剣ファデス。その剣で勝てるかな?」

「なめるなっ!!!!!!そんなボロ剣、素手でも勝てるっ!!!!!!」

「!

「……………はたして、これがただのボロ剣かどうか、

見せてやる!!!!!!」

秋登はそれを観察していた。

(ファデスには膨大な魔力が収束している!!)

「エルファっ!!!!!!気をつける!!!!」

「つつ!!!!!!」とエルファから声が漏れる。

剣同士がぶつかる音しか聞こえない。

秋登は風徒に呼びかける。

” 風徒、エルファの援護するぞ!俺は右からお前は左から。

” 了解!!!”

「^ハ固まれ」!

秋登と風徒がエルファの援護に当たるも

SSSランクを超えるGランクの霸王にはびくともしない。

すると、

「エルファよ。こんな単調な戦闘^{バトル}、俺は望んでいない。」

「もしかして飽きたの!?!」

「そうだ。もう決着^{ケツ}をつけようか。」

「^ハ超魔法<破壊神の鉄槌>!!!!!!」

「うああっ!」エルファが吹っ飛ぶ。

すると秋登に交信が来た

”僕が行きます。”

”ラルト…？分かった。気をつけるよ。”

”はい”

そしてラルトが霸王に立ち向かう。

消滅させる。

「邪魔が！！！！」

霸王は瞬間移動で間合いを詰め、音速で剣を抜き、
斬りつける。が、秋登もそれよりも速い速度で対応し、魔法で追撃
する。

「>超魔法<ホーリーウェーブ聖なる波動」！！！！」

その波動は霸王に直撃した。

第22話 逃走

「ぐはっ！だが、その攻撃が仇となる。
血の剣ブラッディ・ソード！！！！！」
飛び散った血が剣となり、秋登を襲う。しかし、秋登もデイルファで応戦する。

「まさか、防いでる間俺が黙って見ているなんて思っ
てないよな？」

霸王自身も秋登を襲う。が、

「霸王よ、随分お前は卑怯なんだな……」と

風徒が霸王の足止めをする。

ブラッディー・ソードを潰しきった秋登は霸王に攻撃する。

「風徒、こいつは俺1人でやる。悪いが下がってくれ……」

「ははは！1人で私を倒す？後悔すんなよ。」と

霸王は言って秋登を襲う。秋登が力尽きた……。

「……嘘だろ!?!」

すると、秋登の体が光りだす。

「>超魔法<状態入替チェンジ！！！！！」

秋登の傷が治り、霸王がスタスタになる。

「ば……馬鹿な！！！！今回はここまでにしてやる……。

覚えてろよ……。」

「霸王の癖に逃げるのか？逃がすと思ってるのか？」

「やっと俺もデイルファも本調子だ！！！！！！！！！！！」

「クツ、
転送せよ！！！！」

「させるか！！>先手<魔法封印アンチマジック！！！！」

「先手を取るだど!?>封印解除アンチマジック！！！！」

秋登はその隙を狙い斬りかかる。

「転」 「させるか、炎よ！！！！！！」

「逃げる隙を与えないつもりか？」

絶対防御領域ディフェンスフィールド！！！！！！」

「そんな壁、貫いてやるよ」

ディルファ・アタック
「覇剣斬」！！」

「でも詠唱の邪魔はできん！！」ハ転送せよ！！」

霸王の姿が透き通っていく、そしてやがて消えた。

「逃げられた……。」

「いいじゃん。次は倒せるよ。」と風徒とエルファは秋登を励ました。

第23話 合流

（霸王側）

「やってくれるな、小僧……」

次はお前ら全員始末してやる……」

（秋登側）

秋登に交信が来る。

” 誰だ？ ”

” 神です。用件はディルファの強化と

エルファ、風徒、ラルトへの武器の贈呈です。 ”

” さっそく頼む。 ”

” 終わりです。それぞれに武器の説明はしておきます。 ”

「秋登、どうした？」

ずっと、何かを考えている様子だった秋登に風徒が声をかける。

「何でもない。」

すると秋登へ勇者が合流する。

「お前誰だ？」

（この格好見て分かんないのか！！！！）

「勇者シリウスだ。そしてこっちがネレウス。よろしく。」

「ああ。」

（ネレウス 奴だけは何か違う…霧囲気？オーラ？

勇者は気付いてないかもしれないが、たぶんGGダブルジーランクはいつてる

だろう。）

「こいつは風徒、エルファ、ラルトだ。

シリウス、戦って見ないか？」

「俺も言おうと思ってた。」

すると風徒が割り込む

「仲間で傷つけあってどうするんだ！！」

「大丈夫。そのために

「無影響領域」！！」

「無影響領域？」

「そう、ここの中であつた出来事は、これを解除したとき無かつたことになる。」

「じゃあ行くぞ！！！！！！」と勇者が駆け出す。

「先手必勝！！」ドラゴンフレイズ「龍の炎」！！！！！！！！」

「作れ、剣を」と勇者は剣を作り、龍の炎を裂く。

第24話 勝抜

「たじゅうはけんざん多重覇剣斬^ツ!!!」

秋登は凄まじい速さで動き、ディルファを振るう。

しかし、シリウスもそれについていく。

「ザ・ブレイブ勇者の力^ツ!!!」

見えない力が秋登に直撃し、力尽きる。

「つ…強い……無影響領域、解除」!

「俺の完敗だ。」

その時。

「やあ」と声が聞こえる。

「霸王つ!!!」

「今回、トーナメント勝ち抜き戦を行う。」

優勝者には私との対戦権が与えられる。参加を待っているぞ。」

「行くしかない!!!」

数日後

「今から勝ち抜き戦を行う。」

そして…

「一回戦突破!!!」

全員が一回戦を突破した。

さらに、秋登、風徒、エルファ、シリウス、ネレウスが二回戦突破。

三回戦は秋登、エルファ、ネレウスが突破した。

ついに本戦。

「秋登VSファンレム!!!」

試合が始まる…。秋登の一撃でケリがつく。

「エルファVSネレウス!!!」

試合が始まる…。ネレウスが勝った。

……

四回戦は秋登とネレウスが突破。
準々決勝。

「秋登VSネレウス」

ネレウスの強大な力の前に秋登は負けた。

結果：ネレウスの優勝。

霸王カオス対ネレウス。

「炎よ」

ネレウスが炎を放つ。山よりもでかい火球が霸王を襲い、直撃する。

「炎よ」

霸王が負けた……。

「…ネレウス強いな…」

「ば…馬鹿な、この俺が…初級魔法で負けるだど？」

そして力尽きた。すると世界が割れ始めた。

第25話 破壊神

宇宙にいるような崩れ去った世界から声が聞こえた。

「ようこそ、異世界の戦士たちよ。」

「……………？神様！？」

「私は破壊神フィル、汝ら…勝負だつ！！！！！！」

秋登が突っ込む。しかし、一撃で気絶する。

「強い…、でも行くしかない！！！！」と

風徒も走りだす。

「新しい武器、大剣ジェルド！！」

ジェルドで切り裂くが、フィルの姿が薄れ、背後に現れる。

「油断はすんなよ！！」とフィルの一撃が炸裂し、

風徒も吹き飛ばされ意識を失う。

「…創造神よ、我に力を！！」

エルファの周りを白いオーラが包む。

そして走り出す。エルファの攻撃がフィルに当たる。も、あまり効

かない。

フィルの反撃、エルファはすれすれで避けた。

「…超魔法、必中、先手く炎よ、水よ、風よ、土よ、雷よ、光よ、

我が身と重なりて闇を被え！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

「ば　馬鹿な！！」

エルファの魔法がフィルに直撃、ぼろぼろになる。しかし致命傷に

は至らない。

ほぼヤケクソでシリウスが攻撃する。が当然の如く、フィルの反撃

で気絶する。

するとネレウスが参戦する。

「…光よ…」

膨大な光がフィルを包む。

「ハ>超魔法<緊急回避」!!!」

フィルもその魔法からすり抜ける。

「避けられたら意味がないぞ!!!」とフィルは挑発し、

魔導波を出す。ネレウスに直撃した。すると

ネレウスがぼやけ始め、幻影が解けた。

「∴創造神フィンディ。お前など敵じゃない!!」

「ハ>必中<光よ」!!!」

2度目の膨大な光がフィルを包む。

「ぐっ!!!」

フィルも応戦するも魔力量で押し負けする。

あたりに重い音が響く。

「これで終わったのか。」と秋登も安心した。

しかし、現実はずっと厳しかった∴

第26話 強大

気がつくのと、そこは開始地点スタートだった。

秋登はまさか時間が戻ったかとも考えたが、エルファ・ラルト達がいいたので

安心した。その時

「秋登。今までののは序章プロローグだ。」

そしてこの俺は魔王スレイファ。」

(ば…馬鹿な……。ここからが始まりだと!?)

すると誰かがやってくる。

「金出せ!!!」

「盗賊がつ!!!!!」 「炎よ、襲え」

「水よ、追撃しろ」

「なにっ!!」 「超波動」

「守れ」

しかし、魔力の差が大きすぎ、バリアを超え盗賊に直撃した。

2時間後

魔王の城に着いた。

「着いた。はやっ!!!」

そして進む。

大きな扉に魔王の間と書かれている。

「挑戦だ!!!」

「馬鹿がつ!!」 「魔導波!!!」

すると膨大な力の魔導波で、全員が吹き飛ばされる。

そして開始地点の草原に戻った時、皆は

ネレウスがいらないことに気がついた。

秋登に交信が来る

”ネレウスだ。神である私は地上には10日間しかいることができ

ないという制約がある。”

”だからいいのか。”

”そしてお前たちの救済 アファリードを渡す。”

”アファリード?”

”そう。これはディルファを元にして作った剣だ。

だから1時間もあれば馴染めるだろう。”

”ありがとう。”

そして修行を始めた。

1時間後、秋登VS風徒の勝負を始めた。

「無影響領域」

安全を確保し、斬りかかる。

ジェルドとアファリードがぶつかる。

ジェルドから赤の、アファリードから青の波動が飛び出す。

そしてアファリードが押す。

無影響領域を解除する。

「さすがだ、秋登。」

「いや、強いのはアファリードだ」。

ディルファの2倍は強い……。」

そのそばでエルファがディルファに魔力をこめている。

「エルファ、何やってんだ?」

「強化よ!その雑魚剣を超えて見せる!!!!!!」

第27話 世代

「雑魚剣つて何だ！ていうかそれよりこれの方が強えーぞ。」

(言い返せない……)

するとシリウスの姿が透けていく。

「シリウス……？」

「俺は297年前から来た旧世代の勇者だ。魔力が足りないから、ここにはもういられない……」

「そうか……旧世代つてことは新世代の勇者は？」

「もうす……ぐ……来る」

そして消えた。

すると誰かが来た。

「勇者？」

「そう。俺はエイティスつて呼んでくれ。「呼んでくれ？」

僕は地球という異世界から来た。」

「(異世界か?)俺も。こちらの風徒もエルファもだ。」

「そうなのか。てつきり私だけかと思つてた。」

(一人称をころころ変えんなよ……)

「……」

エルファが下を向いている。

「どうした？」

「エイティスつて、私の兄よ……」

「!!!!!!!」

「前から一人称変えてた？」

「いいえ。」

するとエイティス本人が割り込む。

「遊び。普段は俺つて言ってるけど。」

「強えーのか？」

「エルファの4倍ぐらい」

「消える。」

「…（エルファってこんな感じだったか？）…勝負しよう。」

「無影響領域」！！」

「いいよ。」

しかし剣を出しすらしない。

そして秋登が迫る。

エイティスはそれに反応して殴った。

秋登は30m以上吹っ飛んだ。

「強い…フェニックス・ブレス不死鳥の咆哮」！！」

しかし、エイティスは軽くかわし、秋登の背後に回って蹴る。

秋登は領域を解除した。

「強いな、お前。よろしく。」

第28話 爆発

〔魔王側〕

「（俺たちの用意した練習用世界で強くなったが、チユートリアル届かなかった。そんな感じか。）じゃあ、ファイン行ってこい。」
はい。」

〔秋登側〕

突然空から人が降ってくる。

「よう、俺は魔王様直属の四天王ファイン。…あれ？お前らどこかで見たような…」

とりあえず勝負だ。」

（覚えてないのか！？）
すると

「俺が行く。」とエイティスが言った。

エイティスは剣を出し、斬る。

しかし、ファインは避け、殴る。

さらにエイティスはそれを受け止め、蹴る。

「〔魔王の鉄槌〕！！」

大きな魔力の塊がエイティスを襲う。

エイティスが倒れる。

「次は俺だな。」と風徒が行く。

「〔電撃の剣〕！！」と電気を纏う剣を出し、斬る。

しかし、ファインも剣を出し防ぐ。

剣のぶつかる音が響く。

「〔覚醒〕！！！！！！！！！！」

風徒は自身を強化するが、依然互角
すると

「〔超波動砲〕！！！！」

ファインが魔法を放つ。

攻撃は風徒に直撃、倒れた。

「私が行く。」とエルファは斬りかかる。
ファインも防ぐが押される。

エルファは瞬間移動で回りこみ、斬る。

攻撃はファインに当たる。さらに

「多重斬撃！！！」

エルファは凄まじい速さに魔法で補正し、斬る。

かなりの攻撃がファインに炸裂する。

勝負がついた　かと思われたが

「起爆！！！」

ファインは自らを巻き込み自爆した。

しかし…

「解除」

秋登が爆発の直前、無影響領域を皆にかけていた。

何とか無事に四天王を1人倒した。

第29話 自由(前書き)

30話まで目前!!

第29話 自由

すると誰かが声をかけてくる。

「やあ、君が秋登君だね？」

「誰だよ。」

「四天王のフリーさっ！！！！〔第1覚醒〕！！！」

緑のオーラがフリーの周りを包む。

〔第1覚醒〕 生き物は皆魔力を持ち、オーラを放っている。

しかしオーラの色は自分の属性、上級者ならそれを見るだけで対処ができる。

だから、生き物は常にオーラを消している。しかしそのために魔力を結構使っているんだ。

その分を戦闘に回すことで力を1.5倍以上には上げれる。それが

第1覚醒)

「風斬かざぎり！！！」

風の魔力を剣に纏わせ、フリーを斬る。

しかし、すれすれで避けられる。

「〔第1覚醒、第2覚醒〕！！！！！」

〔第2覚醒〕 あらゆるところで魔力を節約し、大地からも供給を受ける。)

秋登に青いオーラが出て、勢いが増す。

「超波動！！！」

巨大な波動でフリーを攻撃するも手刀で裂かれる。

その一瞬のすきで秋登は瞬間移動し、

「魔力注入ダイレクト！！！」

フリーに直接魔力を注ぐ。

「ぐああああああああああ！！！！！」

激痛にフリーが倒れた。しかし、さらに注ぐ。

すると、とうとう力尽きた。

「こんなあつさり？」

すると、

「後ろだよ…フェニックス・プレス 不死鳥の咆哮！」

「なにっ!？」

倒したはずのフリーが魔法を放つ。

「詠唱時間と魔力の関係でこれだけはしたくなかったが…
タイムストップ ムーンウェーブ
時間停止、月の波動」

!!

!!

!!

(しかし、時間停止は1時間も持たない…逃げ!!!!!!!!!!)

第30話 魔獣（前書き）

30話達成！

第30話 魔獣

(終わつた!!!)

「月の波動!!!」

その瞬間、月が赤く光り、波動を放ち始める。

その波動を引き寄せ、フリーに当てる。

「はたして、そんな大技、成功するかな？」

(奴の言うとおり、これの成功率はよくて0・01%!!!
しかし……)

「僕にもできることを、絶対運!!!」

ラルトは運を操作し、できるだけ、バースメント可能性を引き上げる。

「10%、20%、30%、40%

ここまでしかあげられない!!!」

「いける!!!ラルト、ありがとう!!!」

共同!!!」

風徒、エルファ、ラルト、エイティスとつながり

魔力を集結し、フリーを討つ。

「いけええええええええええ!!!!!!!!!」

共同のせいか、いや、意志の強さ故に5人の声が重なる。

そして波動はフリーに直撃した。

「ば……馬鹿な。」

フリーは力尽きた。しかし、魔王は新たな敵を秋登に送り込もうと
していた。

〈魔王側〉

「6体の刺客を送りこむか。」

「ははつ。」

「反応が楽しみだ……。」

（秋登側）

すると突然巨大な魔物が姿を現した。

人間の100倍はある体長で、4足歩行。

「あ…あれは、伝説に出てくる六魔獣の1匹、

超獣アレス！！！！」と唯一この世界出身のラルトが言った。

「六魔獣？まあ、倒せばいいんだろ！

（月の波動・改）！！」

（自己アレンジして詠唱を95%カットした！！

詠唱時間は5秒。）

月の波動でアレスの前足が切れるが即効生える。

「大丈夫、体力は回復してない。」とラルトは言った。

「（炎よ 大地よ 水よ 風よ 雷よ 不死鳥よ 龍よ、

闇に落ちた獣を飲み込め）！！！！！！！！」

色々な色が混ざった黒っぽい球がアレスを包む。

第31話 神々(前書き)

来週は投稿できないかもしれません。

タイトル変でごめんなさい。直しました。

(2/13)

第31話 神々

しかし、効果がなかった。

「うそだろ!?」

「>超魔法<絶対制裁」!」

（これは、今までの行いによってダメージが変わる。）
しかし、効果がなかった。

「火よ 大地よ 水よ 雷よ 光よ 救世主よ、絶大なる魔力にて獣を滅ぼせ」

!!
!!
!!
!!
!!
!!

しかし、効果がなかった。すると誰かが召喚された。

「…………ネレウス!?」

「救世主言ったの誰だよ。っていうか、六魔獣相手にお前らがこんなに苦戦してるとは。

助けてやる。『魔導波』」

「奴には攻撃が通らないんだ!」

しかし何事もなく、アレスの体を貫通した。

「…………うそだろ?今までの努力は何だったんだ…」

アレスが力尽きると、ネレウスは帰って行った。

〔魔王側〕

「アレスがやられた?創造神ネレウスかつ!」

「いいだろう…」

〔神側〕

ここは雲の上。神はチェス、オセロ、将棋、囲碁などありとあらゆる娯楽に浸っていた。

しかし……近くを音速を超えて何かが通る。波動が発生し、あらゆるものが吹き飛ぶ。

ここの中でも上級レベルのネレウスは冷静に考察していた。

「誰だ、魔王とか言ったら潰すぞ」

「あたり。ハ神々の拘束」

初級レベルの神が動けなくなっている。

「何がしたい！！！！」

ネレウスは苛立った。

「お前らを皆殺しにしたいのさ。」

第32話 邪神（前書き）

あと2週間くらいは更新がとても遅くなると思いますが、今後ともよろしくお願いします。

第32話 邪神

「まあ、俺が勝手に殺してやるよ。」

「黙れ、貴様など天界一弱い武器エストラで倒してやる！！！！」
魔王スレイファが接近する。運命神ファドルはエストラを持ち、振る。

地上ではありえないほど膨大な魔力の魔導波が出る。

しかし、スレイファは片手でそれを潰すと、

「魔王の鉄槌」

ファドルを一撃で仕留めた。

「ファドル！！！！！！！！！！」

「スレイファ、貴様！！」

「水の神グレイドーンよ・我に力を、大洪水！！」

「何っ！！！！！！」

スレイファは濁流にのまれる。

(馬鹿な、力が抜ける！まさか…魔力吸収！？)

「このまま息絶える！」

「だが。」

スレイファが碎ける。

「なっ！！！！！！」

「それは分身だ。」

「第1覚醒、第2覚醒、第3覚醒！！」

「さ、三連続詠唱！？」

「ゴッド・ブレイク、神将突破！！」

「な」

こうして神が次々と息絶えていく中…

「面白いやつだ。単独で神に挑む最強の人間か。」

「我の名は超邪神フィールドウルグだ。いざ勝負！！」

「れっはざんりゅうどうじん、烈覇熾流動塵！！！！！！」

(強い、魔力が大きすぎる…だが！)

「〔神将粉碎〕……………！」

両者の魔法が激突する。わずかな差でフィールドウルクの魔法 烈
霸懺流動塵 が

押し勝つ。しかし、威力の弱まった魔法ではスレイファにダメージ
を与えることはできなかった。

「〔神将突破、神将粉碎、神将撃破、神将封印〕……………！」

「四連続詠唱だと！なら

〔ブレイクステイト破滅の運命〕……………！！

これで勝つ……！」

第33話 超絶

魔法同士がぶつかり衝撃波を作る。

そして相殺される。

「邪神か 強いがまだ… なっ!!」

スレイファの足には紫のオーラが纏わりついてた。

「畏かつ!!」

「いまさら気付いても、もう遅い。毒だよ。

しかも強力な。さらに魔耐性が付いているから魔法は効かない。

どう切り抜ける？」

（楽しみだ。創造神と戦いあったその力、俺にも見せてみる!!!!!!
!!）

「ククク… 古い技術だな… 何年前だろうか。

「解け」！」するとオーラが消える。

（間違いなくあれは超魔法を超える魔法 覇魔法 はまほう !!!!!!

なら、こちらも!!）

「> 覇魔法< 天国と地獄 その狭間」!!!!!!」

（この魔法の発動中、敵は魔法を使えない!!）

一瞬にして闇が辺りを包み、切れ目ができる。

さらに切れ目がより深い闇で満ちる。

「なにっ

魔王は堕ちていくが

「> 覇魔法< 重い制約の中で 我が身よ昇れ」!!!!!!」

影響を受けずに上昇する。

（覇魔法を無視し、魔法を使うだど!?

強いものならもう1、2発しか打てない!!!!!!）

「> 絶魔法< 皆と同じ天空 てんく を見る自分

そして平等な力の中ですべてを集めし者の声

すべての生きし者へと届け 絶対的支配者の命令{!

重い魔力がスレイファにかかる。

(これが…… 絶魔法!? …… 強すぎる …… !!!!!)

「 > 絶魔法と同じ世界に生きる獣 けだもの

我の力を持って制す

元ある姿へ戻れ 死の推奨{!

第34話 希望

スレイファも反撃する。

別々の対象にかけたはずの絶魔法の魔力が互いに結び付き、消えさる。

「！！！！！」

(魔王ももう限界、本気で勝負をつけないとこのままじゃ！！！！！)

「>覇魔法<絶望と希望、そして歪みない未来」！！！！！」

(希望をつ！！！)

2人の前に巨大な魔力集合体が創造される。

球体であるそれは魔王を飲み、破裂する。

しかし、魔王には効かなかった。

「!?!」

「球が俺を飲む直前、俺の周囲に無影響領域をかけた。

たとえ死んでも、影響はない。」

「馬鹿な！！死をも無効化する魔法！？魔力がない状態でどうやって!?!」

「魔力供給を受けた。」

「……。」

(何かが来る。神じゃない、人！！！！こいつの仲間か!?!)

〈秋登側〉

「あと少しで天界だ。」

秋登の魔法によってエルファ、ラルト、風徒、エイティスとともに天界へ向かう

〈神側〉

第35話 到着（前書き）

もうすぐ更新再開します。

休止期間が長くてすいませんでした。

以前よりペースが落ちるかもしれませんが、
今後もよろしく願います。

第35話 到着

最後の希望を魔王は阻止した。

「ば……ばかな」

フィールドウルクは力尽きた。

「ハ> 覇魔法< 神と人、死闘の結末 我が身を癒しきれ」
スレイファの傷がすべて修復されていく。
その時。

「お前は！」

〈秋登側〉

「着いた。」

「お前は！」

「スレイファっ!!! 何をしている!!!」

「貴様らには関係ないな。」

「何だと!? ハ> 覇魔法< 生と死の境にあるもの その苦しみと絶望」!!!」

しかし防がれる。

「覇魔法が使えるのか!!!」

と微かにスレイファが驚きを見せた時、
高速で何かが近づいてくる。

「フレストか。」

「四天王かっ!!!」

龍に乗ったフレストが秋登たちを襲つ。

「クイーンズバリア
女王の防壁」!!!」

しかしエルファが防ぎに入る。

「一撃で倒す ハ> 超魔法< 龍墮とし」!!!!!!」
龍が気絶する。

(きたっ!!! これで奴は戦えない!!!)

「甘いぜ？」

フレストは龍を消し宙に浮く。

(こいつ、浮けるの!?)

「浮けねえなんて言ってるねえよ。」

(しかも聞こえてる!!!)

「それが俺の能力だ。」

しかし秋登たちには独り言にしか聞こえない。

(何を言ってるんだ?)

「悪いか？」

(そういう事か。)

「呑み込みが速いな。まっ、そーゆーことで…

☆超魔法<絶望>!!!!!!」

見えない何かが秋登たちを襲う。

その時、風徒の周りに光が漂った。

「何だ!？」

フレストは標的を風徒1人に絞り込む。

しかしその判断は間違っていた。

第36話 正体

「……秋登、殺^やつていいよな？」

「ああ、もちろんだ！」

「それはよかった。ハ炎よ〜！」

（初級魔法！？ 効かないだろ？

……馬鹿な！！）

太陽より大きな火球が出来上がる。

（地球が破滅する！！！！）

と誰もが思ったその時。

「ハ>超魔法<二連続発動^{ダブルマジック}」

（二連続発動は魔法の同時詠唱を可能にする

さらに魔法を唱えるのか！？）

「ハ>超魔法<異空間転送^{ワープ}」！！」

風徒と火球、フレストだけがこの場から消え去った。

「こっちは魔王と、か。」

（風徒側）

「フレスト。殺^やる前に1つ聞く。魔王は誰だ？」

そして数分が経ちフレストは話し終えた。

「そうなのか！！」

「ああ。そして覚悟はできた。やるなら やれ。」

「言われなくても。」

異空間が崩れる。フレストは異空間とともに塵となり…消えた。

（秋登側）

「おし！じゃあ俺が魔王を倒す。」

「無理だ。」

「なんでだよ？」

「死ぬから。〽超魔法<異次元への誘いこゝろ>!!」

「壁よ」

魔法を唱える。

「風徒!」

「秋登っ!!!あの魔王はやばい。」

〽超魔法<ブラックホール暗黒空間>!!!!!!

「フンっ。」

魔王は超魔法を手で払いのける。

「ば…馬鹿な、手で払いのけるだど!?!」

「秋登、奴は人間じゃない」

「そこまでは想像の範囲内だぞ。」

「そして、奴は…生きていない!!!!!!」

第37話 風雨（前書き）

更新が遅くなってますが温かい目で見守っていただければありがたいです。

第37話 風雨

「 奴は魔力、そのものだ。」
風徒が言った。

〔風雨側〕

「どこだよ？ここは。」
突如空から出現した人間 神崎風雨
が言った。

「はいはい、状況はつかめた。ここはファンタジーな世界だなっ？
……？秋登の気配がするな。行ってみるか。」

〔秋登側〕

赤髪赤眼の少年が近づいてくる。

「風雨か」

風雨は中学の入学式にやってきた転校生。

こいつは体育会系だ。

一見細そうでムキムキだから困る。

そして風雨が走り出した。

「お前か？敵は」

風雨は格闘家のように華麗に攻撃していく。

「悪いが、超魔法＜一心同体＞！！」

秋登と風雨の体が重なり、一体化する。

片目が赤色に、もう一方が茶色になり、

金髪の戦士となった。

「金髪だせえよ。」

「うるさい、風雨。」

互いが何気ない会話の中に必死に暗号を潜ませる。
「行くか。」

速度が倍になる。

ソニックブーム
衝撃波が発生し、皆が距離をとる。

「ハ作れ、剣を」

秋登が剣を作り、風雨がそれを振るう。

同じ体とはいえ、息が完全に合っている攻撃の前に
魔王が押され続ける。

「これで終わりだ

一心同体を解除する。

「ハ>超魔法<」

「神崎流抜刀術

一心同体を解除した後も息が合い続ける。

「ハ>超魔法<真紅の龍砲」クリムゾン・ドラゴンフォース！！！！！！

「神崎流抜刀術 龍斬・零式」りゅうぎり・れいしき！！！！！！

二人の攻撃が魔王に直撃する。

「ぐ…ぐふっ！！さすがだ、秋登。

私はお前を倒せなかった……

仕方ない これをやるう。」

魔王は秋登に拳銃のような武器を託し、逝った。

「これですべては終わった、帰ろう。」

<させるか！！>

どこからか声が聞こえる。

「霸王か！！」

<そう！俺が霸王カオスだよ。

ハ>超魔法<吸収と報酬」ドレインフォース！！！！！！>

エルファの目が虚ろになる。

「貴様っ！！！！」

<エルファの魂を持って行った。安心しろ、

2割は残してあるから生きてはいられる。

ただ元に戻したいなら、俺を倒せばいい。

ははははは！！！！！！！！！！>

徐々に声が小さくなり消えた。

「そんな……」

すると風雨が飛び降りた。

「俺たちはこの世界の人間じゃないから、飛び降りても大丈夫だよ。」

風徒が補足の説明をする。

「ならいいか。…よっ！」

皆が飛び降りる。

しかし数秒後

「ラルトも降りてる！？っていつか風徒、どこで聞いた？」

「予想。」

風徒は冷静に言った。

「終わったああああああっ！！！！」

…急に落下速度が上がった気がした秋登であった。

そして落ち続けて2時間後。

ようやく地面が見えてきた。

もちろん皆上手く着地できず倒れる。

が、ただ一人 風雨 のみが新体操のように完璧に着地した。

第38話 終盤

「ハ>超魔法<魂転送」!!!!!!」

秋登がエルファに魂を移す。

「ここはどこ？何があったの？」

するとエルファが目を覚ます。

「お前の魂は霸王が持つてる。だから俺の魂を送り込んだんだ。お前自身の事だし、自分で解決しろ。」

秋登はそう言い残すと意識を失った。

” ついてこい。勝負をしたいのならば。”

” もちろん行く。そしてお前を倒す。”

そして2時間後…

「さあ来い。」

このあたりには何も無かった。

ただエルファと霸王がいるだけだ。

唐突にエルファが走り出す。

「ハ>超魔法<龍の息吹」!!!!!!」
ドラゴンブレス

しかし霸王は軽々とかわし、反撃する。

エルファはそれを避け、剣を投げる。

霸王は一瞬驚くも余裕を持ちながら回避した

その時！背後にまわりこんでいたエルファが銃の引き金に手をかける…

バキユウウンと銃声が辺りに響く。

同時に霸王も息絶えた。

（秋登側）

秋登が魔法を唱えると空間が歪む。

「さあ、行こう。」

「エルファはどうするんだ？」

「エイテイスが聞く。」

「おいてこうぜ。」

”ラルト、風徒。あいつ倒そう。”

”了解！”

「なあ秋登。」

「何だ？風徒。」

風徒が走り、

「見捨てていくなよ！！！！（作れ、刀を）」

刀で攻撃した。

すると秋登の体が歪み…

「久しぶりだな。」

ムーンが姿を現した。

「お前： 秋登はどこだ。」

「私に勝てば教えてやるさ。」

ムーンは拳銃を構える。

「似合わねーぞ」

「魔銃だ。」

「魔銃？」

「魔力を弾丸として使う特殊な武器さ。」

装填に時間がかからないのが長所だが、威力に欠ける。」

「じゃあ…使うなよっ！！！！！！！！！！」

「ふっ！」

ぱんつと銃声が聞こえる。

しかし風徒は刀で弾を切り裂く。

「刀で銃弾を防ぐだと？さすがだ。」

ちなみにキミはこれを光線銃だレーザーガンと思ったかもしれないが、

これは魔力を実弾に変える武器だ。」

「知らねーよ。」

風徒はもう1本刀を抜く。

第39話 最終決戦

〔秋登側〕

「風徒、エルファ、エイティス」

「何?」「どうした?」「何だ?」

秋登はなぜかそこで気付いた。

「偽物っ!!!!!!」

「よく気付いたな……」

3人の姿が魔物に変わる。

「>>天魔法<<神龍ゴッドドラゴンの砲撃!!!!!!」

「天魔法 神クラス専用の緊急迎撃魔法 !!!」

それをこんな餓鬼ガキがつ!!?」

オレンジの光線が魔物たちを襲う。

もちろん瞬殺した……。

〔風徒側〕

爆風が失せていく

そこには倒れたムーンの姿があった。

「勝った。帰るか。」

「転送せよ」

〔秋登側〕

突然、風徒、ラルト、エイティス、エルファが秋登の元へ転送された。

「おおっ!!じゃあ、帰るか。」

「……て、ラルトは?」

「見送りしようと思って。」

「そうか……今までありがとう。」

その時だった。

「残念だが、秋登。お前の行くところは地球じゃない…

あの世だ！！！！！」

おなじみ…いや、久しぶりな声が聞こえた。

「誰だ！？」

「神さ」

「神？」

「そう、神」

「…まさか、黒幕だったのか？」

「いや違う。でも帰ってはいけない。」

「何を言われようと、俺は帰る！！」

「言うと思った。どうせ行っても聞かないだろう…。なら、私を倒すことだな。」

こうして、秋登VS神様の戦いが始まった。

……………

「見慣れた景色だろう？」

「なっ」

神は都市の様な所に、東京に酷似するが、建物が同じな所に

場所を変えた。

「まあいいぜ。〽天魔法<星破壊スターブレイカー>！！」

巨大な黄色の魔法陣ができ、そこから光の弾が発射される。

しかし、神はそれを避けて魔法を使わずに攻撃する。

「馬鹿にしてんのか！？〽天魔法<太陽の光サンシャイン>！！！！」

眩く熱い光が神を包む。

しかし、瞬間移動のように凄まじい速度で秋登に接近し、手刀を振り下ろす。

秋登はすれすれで瞬間移動で回避し背後に周る。

「〽天魔法<銀河破壊ギャラクシーブレイカー>！！！！」

しかし、神も

「〽はじけ」

魔法を使う。

(天魔法が通常魔法に相殺されると!? 相当な魔力のようだな…)

「パワーチェンジ 〇〇天魔法<強弱変更>!!!」

「なにっ!?!」

秋登はそれによつて得た魔力でとどめを狙う。

「クリムゾン・ドラゴアタック 〇〇超魔法<真紅の龍撃>!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「ゴッド・デイフェンス 〇〇天魔法<最強の神の最終防御壁>!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

さすがに神も防御した。

が、まさかの魔力切れに陥っていた。

「そんなあああああああああああああああああああああ

」

こうして決着がついた。

そして、ついに秋登たちは地球へ生還することができるようになった。

第40話 帰還

「じゃあな、そして見送りありがとう。ラルト。」

「また会えるといいね。」

「会えるさ、絶対!」

そして秋登たちは地球へと戻った。

（ラルト側）

「行ってしまったな……」

（秋登側）

「着いたな。しかし、何処だここは？」

ド田舎だな……」

そう、”田舎”というイメージぴったりの場所だった。

そこへ13人の男がやってきた。

「金出せよ」

（おいおい、地球に帰っての初めての思い出が”かつあげ”かよっ
!）

「ぎげんな。ハ炎よ」

「……あれ？出ないっ!!!!」

「ごちやごちやうつせーよ!」

男のうちの1人が大きく腕を振りかぶる。

「なら、ハ強化せよ」

この魔法の効果は実感できた。

そして腹を殴る。

男は10メートル吹っ飛び、その他大勢も逃げていった。

「どうやら、一部の魔法しか使えないな。」

まあ、使わないかもしれないけど。」

こうしてついに秋登たちは無事地球に帰還でき、物語の幕は閉じられた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4845q/>

勇者と魔王

2011年3月21日12時29分発行